二十五絃

泣董作

二十五絃

沱堇作

S-O

二十五絃

汪董作

二十五絃

汪董作

S-0

薄田泣菫作

二十五絵

二十五絃

泣菫作

部門 國文学
番號 二九

二十五絃

薄田泣菫著

この度の大御軍に加はれるわが弟に

目次

公孫樹下にたちて……一
二月の一夜……一三
五月の一夜……二二
翡翠の賦……三一
雷神の歌……三九
金剛山の歌……八三
天馳使の歌……一〇一
一、なかだえ……一〇一

二、あまくだり……一三五
おもひで……一四二
おもかげ……一四六
をろの鏡……一四九
戀ごころ……一八〇
戀のわな……一八八
貧しき浦里にして……一九一
白膠木もみぢ……一九五
もぐらもち……一九六
霜月の一日……一九九

霜月の一夕……二〇四
花うり女……二一〇
おもかげ……二一五
澤潟の歌……二一七
ことうた……二一〇
一、待心……二一〇
三、海女……二一一
三、紅梅……二一二
暮秋野徑の石にもたれて……二一四
神無月の一夜……二一六

神無月の一日……二四〇
虹の歌……二五一
一、旅人……二五一
二、獵人……二五九
三、情人……二六七
四、海人……二八〇
五、農人……二八八
六、隱者……二九八

OKADA

二十五絃

薄田泣菫作

公孫樹下にたちて

一

あゝ日は彼方、伊太利の
七つの丘の古跡や、

圓き柱に照りはえて、
石床しろき回廊の
きざはし狹に居ぐらせる、
青地襤褸の乞食らが、
月を經て來む降誕祭、
市の施物を夢みつゝ、
ほくそ笑する顏や射む。
あゝ日は彼方、北海の
波の穗がしら爪じろに、
ぬすみに獵る蜃が子の、

氷雨もよひの日こそ來れ、
幸は足りぬ、と直むきに、
南へかへる舟よそひ、
破れの帆脚や照すらむ。
こゝには久米の皿山の
嶺ごしにさす影を、
肩にまとへる銀杏の樹、
向脛ふとく高らかに、
青きみ空にそゝりたる、
見れば鎧へる神の子の

陣に立てるに似たりけり。

二

こゝ美作の高原や、
國のさかひの那義山の
谿にこもれる初嵐、
ひと日高みの朝戸出に、
遠く銀杏のかげを見て、
あな誇りかの物めきや、
わが手力は知らじかと、

軍もよひの角笛を、
木木に空門に吹きどよめ、
家の子あまた集へ來て、
黒尾峠の懸路より、
風下小野のならび田に、
穂波なびきてさやぐまで、
勢あらく攻めよれば、
あなや大樹のやなぐひの
黄金の矢束鳴だかに、
諸肩つよく搖ぎつゝ、

賤しきものゝ逆らひに、
滅びはつべき吾が世かと、
あざけり笑ふどよもしや、
矢種皆がらかたむけて、
射繼早なるおろし矢に、
射ずくめられし北風は、
またも新手をさきがけに、
雄詰たかく手突矢の
鏃ひかめく圍みうち。
頃は小春の眞晝すぎ、

因幡ざかひを立ちいでゝ、
晴れ渡りたる大空を、
南の吉備へはしる雲、
白き額をうつぶしに、
下なる邦のあらそひの
なじかはさのみ忙しなと、
心うれひに堪へずして、
顧みがちに急ぐらむ。

黄泉の洞なる戀人に、

生命の水を掬ばむと、
七つの關の路守に、
冠と衣を奪はれて、
『あらと』の邦におりゆきし、
生身素肌の神の如、
あゝ爭ひの七八日、
銀杏は征矢を射つくして、
雄々しや、空手眞裸に、
ほまれの創の諸肩を、
さむき入日にいろどりて、

み冬の領にまたがりぬ。

三

あゝ名と戀と歡樂と、
夢のもろきにまがふ世に、
いかに雄々しき實在の
眩きばかりの證明ぞや。
夏とことはに絶ゆるなく、
青きを枝にかへすとも、
冬とことはに盡くるなく、

つねにその葉を震ひ去り、
さては八千歳、靈木の、
背の創は癒えずして、
戰ひとはに新らしく、
はた勇ましく繰りかへる。

銀杏よ、汝常磐樹の
神のめぐみの綠葉を、
霜に誇るにくらべては、
いかに自然の健兒ぞや。

われら願はく狗兒の
乳のしたゝりに媚ぶる如、
心よわくも平和の
小さき名をば呼ばざらむ。
絶ゆる隙なきたゝかひに、
馴れし心の驕りこそ、
ながき吾世のながらへの
榮ぞ、價値ぞ、幸福ぞ。
公孫樹よ、汝のかげに來て、
何かも知らぬ睦魂の

よろこび胸に溢るゝに、
許せよ、幹をかき抱き、
長き千代にも更へがたの
刹那の酔にあくがれむ。

（三十四年十月、作州津山の近ほとりにて）

二月の一夜

一

きさらぎ寒のゆふべや、
牧のうなゐも通はね、
眺めよ、寂しき末黒小野に、
さゝら河門水かれて、
濕ひ足らぬ荒びや、
艮風のかざ吹、羽むけ強に、
根白たか荳うら葉の

いたづらさやぎにさゝと鳴りぬ。

二

かなた天路のはづれに、
白衣の靡きゆらゝに、
今宵し六日のかたわれ月、
（さはあえかなる病女の
夕眺めするなよぴや、）
さ青のまなじり伏目がちに、
吾世すがれの悲み、——

吐息もするやと惑はしむる。

三

あなせつなさの今宵や、
野もせに靡くさびれの
身に泌み入りては心弱に、
別れし人のおもかげ、
くづをれ泣きし身樣の
それさへ正目にながめられて、
思ひ出いたき昔日の

嘆きよ、ふたゝび浮び來ぬる。

四

わが魂の住家は、
大み慈悲の胸なれば、
人の世み冬の今をさむみ、
旅路の小草しをれて、
眺めよ、さのみ荒るゝも、
なじかは行方を咀ふべしや、
その御力にひかれて、

吾世を高みの春へこそは。

五

そこには救世の御佛、
阿摩の如くよりそひて、
おほ慈悲垂乳のいく藥に、
咽の渇きをうるほし、
玉なせる掌に、
生身の肌をいたはりつゝ、
血汐に染める深手を、

癒えよと和らになだめ給ふ。

六

そこしも不壞の新世、
清きものは甦り、
優女も法衣のすがた花に、
菩提樹かづらかざして、
わな和魂の片身やと、
胸乳のふらくみ匾むまでに、
眞白手しかと擁きて、

さこそは注がめ嬉しなみだ。

七

仇し世空華のながめに、
路惑しを据うるも、
あくがれ心の踴躍いかに、
その誘ひに落ちめや、
遠里小野の野越に、
鳩の子古巣にかへるごとく、
わが魂の伸羽こそ、

いづくをゆくへと辨へ知れ。

八

この末黒野のゆふぐれ、
二月寒のさびれに、
よろづの實母おほみ慈悲の
ふところ深に隱れて、
やがても往かむ彼方の
常春あけぼの望み得るぞ、
吾世の秘密、――憂身の

光や、日も夜も醉ひてあらめ。

（三十七年二月）

五月の一夜

一

吾が凭る小野の野づかさ、
麓つゞきの茅原に、
夕ぐれ五月の闇をふかみ、
眞夏の女神筒姫、

獨りずまひのなぐさや、
夜殿の香爐のかをり高に、
野薔薇空にくゆりて、
まよはし深きも所がらや。

二

こなた右手なる側、
圓葉柳のしげみに、
夏野の色鳥ねぐらさすや、
夢かの心地こそろと、

忍び羽振のさゝめき、——
響きよ、さながら消ぬる程に、
深まりわたる靜けさ、
天路の足音も聞きや得なし。

三

この五月野の夕ぐれ、
人醉はしめの眺めに、
夜頃は踊躍の心地しつれ、
今宵はいかに思ひの

うら寂しさに堪へじか、——
そは、わが道びき、大み慈悲の
光よ、とみに隱れて、
さてこそ弱げさ忍びぬれば。

四

あゝ光明の御姿、
夢まぼろしと消ぬる日、
わが世は空洞の實なし小貝、
一味の海のひたりも、

緣はあらぬなづさひ、——
時刼の濱邊にひとり立ちて、
身にしも逼る海路の
さびしき廣みに心いたむ。

五

眞玉花瓶手もろに、
轉びがちなるならひや、
あくがれ心の扉ふかく、
齋きまつりし操の

歸依しも未だ足らじや、
わが道伴なき世にしあれば、
うき身夜な夜な御影に、
注ぎし涙は知ろしめさめ。

六

くづをれ、――さては自ら
ほしいまゝなる願ひに、
たゞよひ心地の束のひまを、
沈默よ、胸のふかみに、

今しも低きさゝやき、――
月白ほのかに匂ひわたる
この夕暮の刹那や、
あるひは吾世のすがたならぬ。

七

宵闇やをら離れて、
星まだらなる高みに、
さよらの月映照の色や、
眞夏の女神筒姫、

大殿ごもる野づらに、
白がぬ被衣の靡きゆらに、
匂ひ香空にながれて、
夢の氣こゝにも浮び來つれ。

八

わが魂にくゆりし
大御光のしたゝり、
今はた燃りのほのにあれど、
なほ人の世の旅ゆき、

くらやみ路のたづきや。
内なる火照にぬくめられて、
いつかは炎さかりに、
燃えこそあがらめ靈の烽火。

九

其日よ光あふれて、
生身さながら法の身、
み空の立樂やがてこゝに、
心の絃の高鳴、

生命はつよく躍りて、
春海の滿潮きほひ荒に、
いたるや不壞の新代、
解脱の常宮、――歌の御園。

十

わが世秘密の許され、
その日の幸をいさみに、
こよひは野中にひざまづきて、
夢見心地のあくがれ、

御影にいつく比丘尼の
操にたらへる心ばへに、
胸なる龕のあかりや、
守りて靜かに小夜は經まし。

（三十七年五月）

翡翠の賦

一

流ゆるき枝河の

根やはら小菅かすれて、
靡葉そよろとさやぐ夕、
眉根しろき罔象の女、
蘊の衣ぬぎ捨に、
童氣すがたに倣ふほとり、
見ずや、かなた翡翠の
樹蔭にかくるゝ征矢の形を。

二

美しきもの常久に、

可惜身なりや、翡翠の
かいなみ許さぬ花のすがた、
照斑あをき冠毛や、
瑠璃色背になながれて、
さながら水曲の水脈にまがひ、
はた長嘴の爪紅は、
零露を啜るにふさひたりな。

三

葉分の光はだらに、

白き菱の花さして、
樹暗もあからむ夏の眞晝、
水馬うかべる水隱れ、
藻伏小鮒とらへ來て、
朱脛やすらふ柳瑞枝、
去たり顏の若音には、
葉守の神さへ醉に入らむ。

四

蜻蛉田づらに疲れて、
眞菰うら葉にやすらひ、
鼠尾草、鷺草露にぬれて、
匂ひ香しめる水際の
繁みがくれの巢ごもり、
夕月さし入る靜夜には、
夢こそかよへ、御親の
自然の胸なるふかき夢に。

五

そよや、むかし乙姫が、

ほまれの氏を厭ひて、
尼そぎ艶なる御寺ごもり、
御燈さゝぐる夜な夜な、
物忌守りし和魂の
化生か、翡翠人氣見ては、
知らず顔の面もちに、
など然は素氣なく暗に去るや。

六

高音さへづる雲雀の

天飛ぶ風も戀ひねば、
巣造りさかしき巧み鳥の
里居なづむも傲はず、
寂しいかな、川隈の
繁みがなかをば往きかへりて、
禁みがちなる慣ひや、
胸には無量の秘密あらむ。

七

秘密よ、いかに清らに、

はた尊かる寶や、
水の面に落ちなば花とひらき、
染みて水銹も薫らめど、
散る日げにや惜しからむ。
されば包むに和毛まろう
聖き龕と胸縫ひて、
まもるに靈ある翼そへぬ。

（三十六年七月）

雷神の歌

ことし一月十七日、空に雷鳴ありて、大粒の霰さへおびたゞしく降り注ぎぬ。春雷と名けむには餘りに時はやかるべし。當時病みて床にあり、覺えず興に入りたるまゝ、病おこたるを待ちてこの篇をものしぬ。

一

秋も靜かに暮れゆけば、
わが世は來ぬと、白がねの
羽衣ゆらにひきはへて、

天の御蔭をおりなせる
み冬の女神白姫は、
やをら國見の目蔭して、
國原とほく眺めしが、
『み山はざまに葉ずくなの
木原は風にはらはれぬ、
遠里小野に高草の
みだれは野火に焦されぬ、
母よ、姉神染姫の
きのふの榮のおとろへを、

やがて吾世の一の日か、
あな乙姫の幸なさ。』と
歎獻もよゝと打伏せば、
おほ空とみにかき曇り、
雲路とゞろの雪おこし、
天の柱に鳴りどよみ、
しろがねの花はらゝかに、
散り交ひしきる空亂れ、
あなやと見入る束の間に、
山も、野づらも、磯濱も、

白装ひの花やぎに、
『こはさながらや、玉敷の
都心になりはてぬ、
母宮とはに榮あれ、
わが世は君のみなさけに
斯くこそあれ、』と白姫は、
夕闇ふかき水沼より、
そよろとあがる白鷺の
羽衣かろくひるがへし、
天そゝり立つ富士が根の

險しき嶺におりたちて、
去年の宮居に入りませば、
御垣守する舍人の
霙、しら雪、はた霰、
面魂の醜男らは、
み階のもとに侍ひて、
今日を初日の大御代の
鎮まりわたる平和に、
事あれ顔に身がまへぬ。

二

こゝはみ冬の大宮を、
戌亥に見たる空のうへ、
雲の戸五百重さし閉ぢて、
百日百夜の籠居や、
吹き透く風の寒がりに、
虎斑、星白、まだら毛の
毛衣ふかくひき被ぎ、
寝様まろなる霹靂神。
胸にゐがくは水無月の

青葉さしたる山越えて、
遠乗りあるく夏の夢。

夢の巻

思へば、むかし吾母の
玉依姫よ、唯ひとり、
しろがね籠携へて、
春の日ながを野に山に、
花つみすさぶ途すがら、
透影きよき石川の

蟬の小河の河岸や、
圓葉柳のかげにして、
水波ゆらに流れよる
丹塗の矢柄ひろひ得て、
齋きかへりし其日より、
身は徒ならずなりそめて、
產みし男子ぞ、荒み魂、
顏逞しき吾身なる。

乳離しけむ三歲の春、

祖父八尋の屋を築き、
八の扉をひきかため、
八十氏人をつどへ來て、
八汐の酒を掬みかはし、
七日七夜の酒ほがひ、
一花心興がりて、
吾を腕にかき擁き、
『あはれ孫よ、處女なる
玉依姫のおのづから、
身ごもりにたる汝かはた

あらじや、さては客人に
覺えの父の顏あらば、
させよ。』とばかり給ひたる
盃はたと投げあげて、
『父はかなたに、その昔、
天のみ蔭の長ごもり、
わが世に飽きて人知れず、
紅の杜にくだりまし、
ひと日丹塗の矢となりて、
蟬の小河を流れたる

火の雷の命ぞ。』と、
小鬼の如く小躍りに、
棟の甍を踏みやぶり、
雲路はるかに上り來て、
父の宮居にかへりしが、
ふり殘されし氏人は、
『あな畏しや、荒み魂、
別雷の命ぞ。』と、
御生の山の山もとに
御殿たかく築きあげ、

祭壇ひさに榮はえて、
人幸あれと、幾代にか、
齋きつぎにし神業や、
今日また馴れし物めきの
枕べ近くどよもすに、
雲戸のまより見おろせば、
あなや瑞枝の下がくれ、
黄金の鈴の橘の
花かぐはしく咲きくゆる、
都ほとりの驛路に、

新よそほひの人なだれ、
松尾山の諸かづら、
冠にかざす加茂衆や、
公卿の孫か、白鞍の
近衛使の神まつり、
塗の轅の牛車、
花筒ゆらにたゆたひて、
廣前ちかく軋るにも、
今年も春は暮れゆきて、
今し五月の半ば頃、

吾世とこそは知られけれ。

御生の山の山もとの
氏人いかに心して、
いつきの宮の忌竹に、
さのみ別れを惜むとも、
春はふたゝび歸らめや。
見よ、くづをれの佐保姫は
峰越の路にゆきかへり、
麓木原にわけ入りて、

青葉のかげに隱れしが、
今また野路に現はれて、
花ぶさふさにこき入れし
綠の袖をかき擁き、
夏かげ深き山こえて、
落つる姿の忙しなさ。
譬へば、師走晦日の夜、
速鞆の瀨戸潮おちて、
岩根あらはに干る頃を、
苅和布神社の宮司らが、

白衣の袖をひきからげ、
松明のかげに鎌とりて、
苅るや和布の一にぎり、
また寄せかへる潮泡に、
驚きたちて逃ぐる如。

今し代繼の前追に、
龍馬躍りて、高天の
御階とゞろに曳きいづる
白がねの輪の飛車、

逸り男の夏の日は、
遠見の目蔭さしかざし、
『かなた、み空の脚もとに、
雲ならざるに漂ふは、
海か、幾代の敵なりき、
わが戰鬪の一の矢の
幸は汝に。』とほゝゑみて、
鋼鐵の弓を曳き絞り、
矢頃さだめて射かくれば、
矢は天がける隕石の

雲路のきほひ、眞下りに、
額青白き海神の
脾腹ぞ深に射貫きたる。
されば痛みの溜息か、
海に激しき聲ありて、
恨み怒りの眼ざしに、
氣色ばみたる海の神、
つと起ちあがる身ぶるひに、
浪は崩れぬ、逆まきぬ、
その勢に嗾けて、

科戸の國を駈けいづる
強弓取の大風は、
廣き翼を羽ばたきて、
おほ空低うゆきかへる。

あゝ戰鬪は始まりぬ、
駿河の國の庵原なる
不來見の濱の姫神が、
岩木の山の根に伏して、
秋の夜ふかく男の神は、

荒ぶる鬼の戯れに、
手兒の呼阪越えかねて、
荊小路に眠るやと、
神の名呼びて覺むる如、
あゝ戰鬪よ、夢にさへ、
思ひ出ては慕ひたる
戀しき友は汝なりき、
めぐり合ひつる今日よりは、
滅亡の日まで伴なへと、
長立たかき身をおこし、

裸の脊には九つの
天つ鼓をひき結び、
右手には長き電の
獵矢の束手にぎりて、
招けば黄泉の眞洞より、
生絹かい裂く響して、
走りよりたる物の怪の
爪長鼬、雷の鳥、
ふたりを從者に携へて、
脚は櫓か、高らかに、

立てるは黒き虹の橋。

見よ、戰鬪はたけなはに、
空をどよもす貝鉦や、
軍皷のはためきに、
勢はたがひに入りみだれ、
打物ふるふ歩いくさ。
創手脾腹に負ひながら、
張魂の海神が、
しろがねの輪の飛車、

浪の底にや沈めんと、
霙もよひの寒空に、
汐吹高く卷きあぐる
北なる海の鯨子の、
勢あらき息ざしに、
狹霧しとどに頻吹つゝ、
雨の腕をさしあげて、
玉の轅をうかゞへば、
あな雄心の日の神や、
熖の鞭をかざしては、

駒の蹄の高ゆきに、
天路とゞろと踏鳴し、
尻目に海を嘲りて、
勝ち誇りたる形姿。
時に陣場を退きて、
天の柱の片かげは、
息やすめする大風は、
時こそ來れとにこやかに、
廣き翼を張りあげて、
俄かにおこる中空や、

疲れ伏したる海の背に、
的射させじの楯板か、
端反陣笠かたむけて、
羽莖も脆にくだけよと、
打ちあらげし羽叩に、
霧はゆらゝの波寄に、
輪形をうちて卷きよれば、
息ぐるしきや、日の神は
玉なす顏をそむけつゝ、
手綱かい繰る飛車、

轍の跡もしどろにて、
雲の門ふかく逃のびぬ。
外には黒きくらやみに、
うか狙ひよる大嵐、
海を誘ひて同音に、
『さて日の神の報強や、
雲の宮居の長ごもり、
顔の深手の生癒を、
天つをとめに誇るか。』と、
嘲り笑ふ鯨波の聲、

黄泉のはてもや動むらむ。
あゝ日の神は破られぬ、
下なる邦のともがらに、
任せはつべき高座か、
今大天の名のもとに、
戰ひすべき日こそ來れ、
『科戸の神も、海神も、
鳴を鎮めて伺へよ、
吾ぞ弓矢の譽ある

別雷の命なる、
わが相殿の日の神の
負の軍を耻らひて、
加勢と名のる生兵ぞ、
疾く陣營をたてなほし、
晴の軍に備へせよ、
さらば。』と太き黑金の
十束の鞭をふりかざし、
一の鼓をはたと打てば、
爪長鼬音を負ひて、

龍の宮居にかけおりぬ。
二たび打つは二の鼓、
こだま擁きて雷の鳥、
科戸の國に飛び去りぬ。
殘る七つを一時に、
とどろと打てば、大地震の
搖るゝが如き物あらび、
空は響きの身ごもりの
いたき痛みに堪へずして、
息切しつゝ身もだえぬ。

『世に手強なる誰ありや、
野槌、河郎、天のざこ、
鬼も、小鬼も、禍神も、
皆悉くつどひ來て、
わが手力に觸れずや。』と、
闇を蹴たてゝあまたゝび、
天の街を駈けながら、
手馴の弓の馳引に、
ひかめきわたる電の

矢は、神無月並び田の
稻田の面に群がへる
阜螽の如く飛びちれば、
あなや、『眞闇』の長すがた、
立處もゆらによろめきて、
烏黑なるくらやみの
吐乳もすると見る程に、
射ずくめられし大風は、
深手にひるむ鵜鳥、
波の穗がしら、高すなご、

星斑なる血に染めて、
縒羽たゆげに塞ぎつゝ、
磯山かげに逃ぐる如、
眞廣げ姿くづをれて、
故里とほく落ちゆけば、
負腹だちし海神の
額は白髪の大童、
血戯しつゝ立ちわかり、
怒り眼に睨みしが、
つと腹向に覆へり、

そゝぎも荒く倒るゝや、
海は乳母のをさな兒を、
抱くかの樣に手をのべて、
づぶと浪間に引きいれぬ。
かくとし見つる日の神は、
喜びあまる相鎗か、
夕立雨を投げながら、
寄手の霧を追ひのけて、
また現はるゝ車の上、
玉の面のほゝゑみに、

闇はさながら明らめば、
折こそあれや、女樂、
雲路はるかに鳴りどよみ、
天の御蔭のきざはしに、
きらびやかなる玉衣の
天人八人したがへて、
眞夏の女神筒姫の
時盛りなる出ましや、
反わた殿の行ずりに、
散華路にひるがへり、

ゑがくは虹の光の環、
代は安らかに治まれど、
なほ戰鬪にあき足らず、
われは嵐を追擊に、
青葉ぬれたる山こえて、
雲居の端にとどろきぬ。

三

天そゝり立つ高山の
險しき嶺に宮居して、

冬しろしめす白姫は、
ふと聞馴れぬ耳鳴に、
清き眉根をひそめしが、
今眞玉振る御聲に、
『かなた辰巳の空の上、
夏ならざるに雷狼の
はためき鳴るぞ訝しき、
覺えある子は駈けゆきて、
事の樣をば伺へ。』と、
令旨ほがらにありければ、

『畏まりぬ』と、同音に、
霙しら雪はた霰、
小躍しつゝ立ちあがり、
曳くは北氣の尾白馬、
粗き馬氈に跨がりて、
天の街をひた駈に、
鼓の音にしのびより
さと引きあくる雲の門、
見れば赤熊毛の霹靂神、
左手は脇の九つの

軍鼓を打鳴し、
右手には長き電の
矢束高くふりかざし、
毛臑あらはに踏みあげて、
神樂舞する物ぐるひ。
『こは寐おびれの狼籍ぞ、
術こそあれ。』と勝鬨に、
つと亂れ入る逞兵の
つららの投矢投鎗や、
氷雨吹き散る爆彈に、

寐ほけの夢はやぶられて、
脊さむけだつ霹靂神、
兩の手首のかぢかみに、
矢柄はらはらに取り落し、
『あな淺ましな、夢かとよ、
誰が構へたる非興ぞ。』と、
宵まどひする童子の
寐おびれ樣に俯伏して、
ふたゝび寒き長冬の
夢に隱るゝ寐相かな。

寄手は様を見はてぬと、
事なし顔の陣拂ひ、
雲の扉をひき閉ぢて、
白金なせる削氷に、
扉の隙を塗りつぶし、
風を逆さに乘り替へて、
跑踏するも誇りかに、
天路とどろと歸り來て、
宮居の門にかしこまり、

事の仔細をきこゆれば、
笑を湛へし白姫は、
若音きよらに、『例ながら
あな勇ましの振舞や、
越の白山、立山は、
わが本宮の二柱、
そゝる背長は九千尺、
夏もみ雪の牧あれば、
北吹く風の尾白馬、
痔だに見えず飼ふべけれ。

こは勲功の賞典ぞ、
疾く入峰して守れよ。』と、
やをら白衣の裾ひきて、
大殿ごもりありければ、
『君の恩をいたゞきて、
さらば御暇さふらへ。』と、
霙、しら雪、はた霰、
相乗る雲の走り舟、
牧に、林に、湖に、
越ゆればやがて筑摩なる

桔梗が原を俯伏に、
見おろす空の遠乗よ。
珠洲が岬を右にして、
七尾へかへる舟人は、
飛彈の境に近よする
雲の旗手を仰ぎ見て、
今宵も雪か、山越の
子はあらずやと惑ひては、
帆綱解く手もたゆむらむ。

冬の日とみに暮れゆけば、
大野に立てる夜の神の
黑き裳裾を脱ぎ捨てに、
天そゝり立つ二柱、
越の白山、立山の
麓に伏せる國々は、
夜すがら絶えぬ雪降に、
髪しらむまで老ほけて、
夢まぼろしも思ほへず、
事なげにこそ眠りけれ。

金剛山の歌

（三十六年四月）

一

夜は長かりき、『くらやみの
黑き幕はたぐられぬ、
時こそ來れ、めざめよ。』と、
嗄聲たかきどよもしに、
千歳の夢はやぶられて、

身は寢くたれの長姿、
大童なる額にして、
あかつき空にめざむれば、
あなや身側に吹きよせて、
息まき荒き羽ばたきに、
木立をふるひ、草を薙ぎ、
空門とゞろに岩を搖る
天の荒し男、志奈都彦、
『今こそ覺むれ、山脈の
八百の群より撰られたる

大山祇よ、とことはに、
榮を。』とばかり呼びすてゝ、
さながら逸の背撓馬、
肌背たゆらに躍らせて、
南をさして飛び去りぬ。

二

薔薇色ごろも靡けたる
朝の童女はなやかに、
曙の戸をひきはづし、

天の榮をかたむけて、
注ぐや、黄金しろ金の
照の亂れをもろ肩に、
やをら國見の目蔭して、
遠方の空を眺むれば、
天そゝり立つ大峰や、
また峰中の山ぞひに、
風は疾渡り駈けめぐり、
玉置山のかなたより、
さと身隱れて眞下りに、

吹きおろすらむ熊野浦。
浪の音ゆるき朝なぎに、
眞帆眞廣げにひき張りて、
鳥羽路へわたる舟人は、
山いたゞきの空みだれ、
雲のちぎれを見やるにも、
『上帆をあげよ、山颪
吹きこそ來れ。』と高らかに、
板子に立ちて騒ぐらむ。

三

東、鷹鞭、高見山、
北は葛城、生駒らの
右左なる山なみは、
いつを日待の名こそあれ、
夜中ごゝちの事よげさ、
夢ふかげなるこの朝け、
誰ぞや麓にけはひして、
直走りする沓の音、
そや、み吉野の水ならぬ

誰が子目敏のふるまひぞ。
あゝ高天の大み蔭、
笑聲どよむ天人の
美き歡喜のしたゝりが、
夜な夜な峰に雨ふりて、
岩根けはしき谿間より、
落ちつどひてや、白金の
眞澄の色の吉野川、
汝も時世の先達の
つとめを分つ友となれ。

四

あな額白のわが友が、
ひた走り入る湊江よ、
朝潮はやく打よせて、
浪の音どよむ紀伊の海。
思ひ出れば天地の
ふた別れせし當時や、
長すぐれたる山祇の
心驕りに睦まじと、

龍の宮女を携へて、
青うな原におりゆきし、
大海神よ、とことはに、
座あらそひの企みに、
胸のゆらぎの隙をなみ、
槽尾たけ髪蘆の花、
風のあらびにそゝけては、
さすがに老の見えもすれ、
胸乳ひまはた張高に、
肩をあげては憤り、

また面構へくづをれて、
高笑する若やぎや、
なほ新代の一の座の
生挑には堪ふべけれ。

五

わが踝の近ほとり、
やまと國原ところ狹に、
世を營める人やから、——
時のあらびの高浪に、

法も、掛想も、學藝も、
皆がら龕をこぼたれて、
よるべ無き身の今ながら、
ひと夜高根の風越に、
巣を失ひし鳶の鳥、
朝羽たゆげに幾度か、
古枝の空をゆきかへり、
はては峰越に遠山の
山ふところに飛び去りて、
また鳥塒ゆふ雄心の

えは頽ほれぬ勢や、
襤褸素脚の様にして、
荒野の路にかけめぐり、
胸座はたと敲きつゝ、
『美しきもの甦へれ、
汝が世ふさへる高座の
礎こゝにおかれぬ。』と、
空どよもしの聲ひゞき、
げにいぢらしき人の子の
猛く尊きすがたかな。

六

この曙にめざめたる
吾世の幸のたぐひなさ、
八千歳ながき來し方の
古裝束を脱ぎすべし、
智慧と力に足ひたる
生命を繼がむ日よ、――この日、
法起菩薩と明王は、
頽廢堂をたちいでゝ、

木原した路眞くだりに、
麓の小野へ駈けおりて、
川邊づたひに磯濱の
波打際に去れよ、ゑた
一言主は唯ひとり、
乾跡も見えぬ山峽の
懸路の亂れ、藤かづら、
躓きがちに行きすぎて、
朝暗ながき葛城の
古屋の洞にかへりゆけ。

われは明けぬる二の國の
光の海に身はぬれて、
天の柱とそゝり立ち、
行きまどふらむ子の爲に、
朝日子高くさし示し、
人よ、かなたに、新代の
不壞の耀き、——無量光、
玉の顏ばせ現はれぬ、
汝が乘物の轅をば、
そこにと許り敎へばや。

七

ひねもす空の八衢に、
すべる車の煌の輪の
清きどよみを聞きながら、
吹息する夜は神秘の氣、
虹のごとくに花やぎて、
展くや、こゝに大天の
さかえ溢るゝ藐姑の山、
高き清きにあくがれて、

『いでゐ』の國に遊ぶ子ぞ、
正目にかゝる常世べの
かゝる奇靈も仰ぎえて、
生身さながら白金の
御座にすがる醉あらむ。

八

あゝわが丈よ五千尺、
脚は下なる野を踏みて、
頭は高く雲に入る、——

そのかみ闇のとろゝぎの
二に別れたる初めより、
山と聳ゆる大悦を、
自然よ、君に捧ぐると、
今歳この春若やぎて、
どよみわたりぬ金剛山。

（三十六年三月）

天馳使の歌

なかだえ

尋ねいでたる伊弉冊の
『待ちね』とありし約言に、
黄泉大門の外がまへ、
烏羅なるくらやみの
釀のふかみに立ち待てる
妻覓狂の伊弉諾は、

長立ながき黒金の
柱づたひにおろし來る
夜深の冷におどろきて、
御衣の袖をかきあはせ、
『女神はありや、常闇の
長きに今は待ちわびぬ、
黄泉の戸なればえぞ分かぬ、
わが國原の夜半ならば、
昂星はすでに七階の
天路の旅は經ぬべきを、

長ものがたり程こそあれ、
黄泉門の外のあかるみに、
汝が生肌のきよらさを、
見ばやとのみにあくがるゝ
神の心は知らじか。』と、
『汝妹』と高く呼びはなち、
聞耳たてゝ伺へば、
あなや眞洞の空鳴に、
『汝妹』と低くこだまして、
また立ちかへる鎮まりに、

『さては仇なる約言や、
黄泉戸喫の名こそあれ、
戀の力のひとすぢに、
絶ち難からむ何ありや、
黄泉門の守にあらそひて、
また現し世にかへらめと、
ありしは淺きたばかりか、
術こそあれ。』と獨りごち、
やをら黄泉門に忍び入り、
常夜の闇の手さぐりに、

弓丈八十路を過ぎくれば、
狹霧ゆらゝに漂ひて、
人香かすけきほのめきや、
故こそあれと男の神は、
左みづらに刺しませる
湯津の爪櫛、男柱の
一齒に鑽りし忍び火に、
つとくらやみを見入るれば、
黑金透戸ひからしく、
鎖しかためたる洞穴の

石床くらき平伏しに、
衣脱ぎすべし、髪を解き、
脹れ爛れたる背に、肩に、
蟲とろゝける女身を、
齋き顔なる雷の
群よ、赤熊毛の童形、
大雷は髪際に、
火の雷は胸ぐらに、
黒雷は鳩尾に、
裂雷は臍下に、

臂には土の雷と、
若雷と立ちならび、
脛には伏せる雷と、
鳴雷とあぐみゐて、
手がらみ解かず俯伏に、
溜息低くわななける、
これや生肌つやゝかに、
くろ髪ながく匂ひけむ、
ありし女神の死身かと、
見懲りはてつる戀ざめに、

湯津の爪櫛とりおとし、
ぬき脚しつゝ後しざる
御沓の音を片耳に、
つと身を伸しゝ伊弉冊は、
『忍びあるきよ、君ならぬ、
こゝに誰が子の差脚ぞ、
黄泉とほくもたどりしは、
生挑みなるたはむれか。
死の唇にそゝぎては、
よみがへすべき戀水は、

掌ふかく掬みながら、
雫もとめず覆したる
疑の手のわななきや、
あゝ『待たしめよ、待ちがてに、
彼を黄泉門に誘ひて、
汝が死肌に試みよ、
許されか、はた永久の
とらはれ人か、いづれ。』との
神の御言はさだまりぬ。
あはれ今こそ、伊弉冊の

胸の火黑く燃えあがれ、
誰ぞ、追討に逃足の
信實ものを捕へよ。』と、
嗄聲たかく罵れば、
『お』とくらやみに答して、
八つ雷のおもひもの、
綽名嫉妬と呼ばれたる、
よみの醜女の八人らが、
烏羽色の蠱ごろも、
裾もほろゝに駈けいでて、

圍み擊する手ばやさに、
身をかへしたる伊弉諾は、
黑實かづらを脫ぎすてゝ、
投ぐれば蒲子はらゝかに、
醜女八人が手もおかず、
ひろひ食む間をつとぬけて、
黃泉門の外にかけくれば、
追鳥狩の風ながれ、
風間を待ちて直路に、
追羽うちつゝ逃鳥の

遠出にせまる隼か、
またいきほへる醜女らの
足音まぢかにはためきて、
かい擴げたる手先の
後髪にも觸るゝやと、
見れば、反身の腹むきに、
道逸しつゝ伊弉諾は、
ほぐれし右のみづらなる
湯津の爪櫛ひきかぎて、
捨つればかはる筍や、

醜女八人が手だまりに、
ぬき食むひまを逃げのびぬ。
追手が樣のもどかしと、
透戸がくれの垣間見に、
足ずりもがく伊弉冊は、
あなや蔀をへし折りて、
半ば開きし透間より、
身を側めつゝくゞりいで、
八雷をさしまねき、
頃は霜月こがらしの

木々の落葉を吹きまきて、
谿のはざまに入る如く、
道もとゞろに息まきて、
ものものしやと追ひすがる。
されば命は御佩の
十拳の劍ぬきはなち、
しりへの方に振りながら、
黄泉比良阪、岩はざま、
關の懸路にたどりつき、
たとへば、五月さみだれの

晴のひと日よ、河守が
水量まさりにおどろきて、
枝河口の水門なる
樋の戸手ばやに鎖す如く、
はざまも狹にそゝりたる
千曳の岩をゆりおこし、
しかと阪根を支ふれば、
進みかねたる伊弉冊は、
岩かどごしに麾ぎ、
『さのみ逃脚すみやかに、

わが手先を逸れぬとも、
天なる父のあざけりを、
聞きのがるべき汝が身かは。
あゝ生戀のへろへろ矢、
おほみ心の試みに、
黄泉門一重をえは貫かで、
われと胸乳を傷つけし、
射手のてだれの譽れさや、
そのおどろきに弱げさの
『幸』は矢目よりすべりいで、

汝が魂の盜み食み、
甘らと『憂』が忍びしを、
事よげさなる面や。』とて、
あざ笑ひつゝ罵れば、
『誰ぞ、眞おもてに、わが戀を
試みらると言ひ張らむ、
其奴さこそは伊弉諾の
劍を怖ぢぬ猛者たらめ。
さきに汝のうらわかき
肌のぬくみに咲きそめて、

今は黄泉の石床の
冷にしぼみし戀の花、
咲くにしぼむに試みの
殊更めきし何の名ぞ。
汝が死肌に添臥して、
息ざしからき接吻に、
生命の水を干さんには、
なほ『憂』もこそまさらめ。』と、
反鞘うちし高ぶりに、
『いかに、八十度汝が戀を、

試みらると呼はんに、
何を弱みのたゆたひぞ。
その口清に責られたる
わが生恥の、死恥の
むくゐよ、あはれ燃えさかり、
日々に汝が子の千人をば、
牲に。』とあれば、『よかんめれ、
さらば顔よき妻をよびて、
日々に千人と五百人を、
産まんが、いかに、其日まで、

汝が季の子を斬りすてし
劍は鞘に、女神よ。』と、
いはせもはてずおろ聲に、
『あなや、迦具土死りしか、
黄泉の眞洞の夢まくら、
なげきを吾子の聲かとは、
母は僻耳きかざりき、
あな哀れや。』と伏しまろび、
やまと國原流れ江の
水音の笑も聞馴に、

咽びの色にどよむまで、
欷歔もよゝと嘆きしが、
『天なる神も見そなはせ、
失はれつる迦具土の
仇はかくぞ。』と立ちあがり、
つと駈けよりて比良阪の
かための岩を跳ねのけし、
その手力のすさまじや。
八雷と醜女らを、
手まねきしつゝ追ひすがる

面魂の荒ましに、
怖氣だちたる伊弉諾は、
透山かげの篠原に、
獵りいだされし鹿の子の
足音のみだれ、はらゝかに、
落ちゆく方よ、丹後なる
速石の里の久志の濱、
遠目に青き浪の花、
まきては開く與謝の海、
磯回にちかくそゝりたる

天の玉橋、たからかに、
半らは雲にかくろひて、
白光する欄干の
ながめに心をどりては、
脚は空なるいきほひの
駈よ、勇みよ、ましぐらに、
橋のたもとに走りより、
身をすくむよと見る程に、
つと梯子に跳ねあがり、
手ばやに柱たぐりつゝ、

中空たかく攀ぢのぼり、
目蔭をさして見おろせば、
あはれ伊弉冊、すさまじき
黄泉の女神、橋立に、
よぢては滑り、伏しまろび、
また立ち上り縋れども、
のぼらむ術もあらなくに、
『知らずや女神、すべらかに
汝が手の橋に堪へざるは、
しろ金なせる欄干の

手ざはり圓きゆゑならで、
黄泉の眞洞にふさひたる
醜女を、天の八十蔭の
をとめに恥るおもひぞ。』と、
語りのこして脚ばやに、
ふむや沓音とゞろかに、
橋詰ぢかう攀ぢし頃、
見よ、白眼なる伊弉冊の
みづらは活きて蛇となり、
鎌首たかく諸むきに、

舌打しつゝ火を吹きて、
つと大空をふりあふぎ、
抱くは太き橋柱、
思ひ入りたる手力に、
をめきをらびて搖ぶれば、
八雷と醜女らは、
空手たゝきて同音に、
『今こそ神のたくらみと、
小箕にふるふ粃がらの
いづれ重きを見るべけれ。

罪よ、嫉妬よ、疾くよせて
死の大母に加勢せよ、
よろづの價値と支配とを、
高み座より奪ひきて、
物みづからにかへらしめ、
憤れる神の壓口の
幅試みむ日こそ來れ、
見よ、橋柱かたむきぬ、
折れぬ落ちぬ。』と呼ぶ程に、
天の玉橋なか折れて、

あなや、地鳴の聖より、
光は背に洩るゝやと、
常夜の守のまどふまで、
根はすさまじきどよめきに、
倒れかゝりし與謝の海。
海はをのゝき、高這ひて、
潮泡あらくしぶきあげ、
沖べはるかに逃れしが、
また立ちかへり爪だちて、
高胸さわぎ押へつゝ、

橋脚ぢかく忍びより、
はては甘らに、安らかに、
胸乳に抱き、手にまきて、
さゝやき交す形すがた。
事のあらびの烈しさに、
怖氣だちたる逃脚や、
女神のかざす手招きに、
『あゝ天の橋こぼたれて、
現し人の世、とこしへに、
黄泉の戸にこそ近うなれ、

忘れがたみの愛子らに、
心殘りのあらじかや、
眞情ものなる伊弉諾。』と
勝閧たてゝ引きあぐる
黄泉の軍をのぞみつゝ、
命はかなた、橋詰の
男柱に身をよせて、
そよ、そのかみや大神の
み言かしこき御召に、
女神をひきて御殿の

み階のもとにひれ伏せば、
『あはれ吾子よ、汝らの
利心つとに知るごとく、
とはに動ぎて撓まざる
わが魂の手力は、
とろゝき搖るゝくらやみに、
國あたらしう築きしが、
まだ浮きてのみ漂よへば、
今よりおりて凝りかため、
汝が子を產みて常久に、

天つ榮を布くとせよ、
青海原をさぐるべき
天の瓊矛はこれにあり、
たどりゆくべき大空の
途のとだえは斯くこそ。』と
殿もゆるぐ銀輪の
天つ高聲ほがらかに、
『橋立あれ』とのたまへば、
おほ空いたく身もだへて、
仰反うつと見るほどに、

闇はにはかに中裂けて、
さと白光ながれつゝ、
あはれ浮橋反がたに、
欄干ながくかゝりしに、
風なぎわたる越の海、
空にたゞよふ蜃氣樓、
蟲かとばかり危がる
魚津の浦の蜃の如、
眼つぶらに見入りたる
命ふたりのおどろきや、

その驚きもよろこびの
渦の深みにかくれつゝ、
天の瓊矛をいたゞきて、
み蔭の庭をひきさがり、
踏むや玉橋とゞとゞと、
御衣の袖をひるがへし、
ひるがへしつゝ降りゆきし、
むかしを更に忍びては、
今の悲み堪へがてに、
聲音も低う打ちしめり、

『その玉橋もやぶられぬ、
仇はもるかに比良阪の
關をかなたへ落のびぬ、
天と地との直路こそ、
とはに絶ゆれ。』と獨りごち、
天路かへるもたどたどと、
神の殿居にいでむきぬ。

あまくだり

ひと日夜ながの墨染の
幕はゆるにからげられ、
まなじり青き明星の
火採の童さき追に、
若ざかりなる曙が、
花笑すがたにこやかに、
天のみ階にたゝす頃、
玉の御殿の高座に、
權威あふるゝ聲ありて、
『あゝ夜はあけぬ、さもあれや、

魂に息する神の子に、
日も夜も何のわかちぞや、
いま來謁を命ずるは、
朝政きくならで、
まめ心ある汝らに、
神ばかりする事こそあれ、
天馳使まゐれよ。』と
八十隈おちずどよもすや、
『畏まりぬ』と西東、
飛行自在の大衆は、

さと旗じるし靡けあげ、
伸羽うちつゝ走せまゐり、
天の八十蔭ところ狹に、
肩ずりながら並みゐれば、
御垣守する近衞らは、
廻廊ふむも誇りかに、
箙の矢束鳴るまでも、
鎧づきしてゆきかへる。
よしと見給ふ大神は、
高み座なる白がねの

光のなかに立ちあがり、
『きけよ、息より產れたる
枝神ながら、吾子なる
天馳使――そのかみに、
思ひおこせる企や、
とはに動きてをやみなき
わが魂の手力が、
ま闇の淵に築きたる、
かの二の宮の新國に、
天の榮を布けよとて、

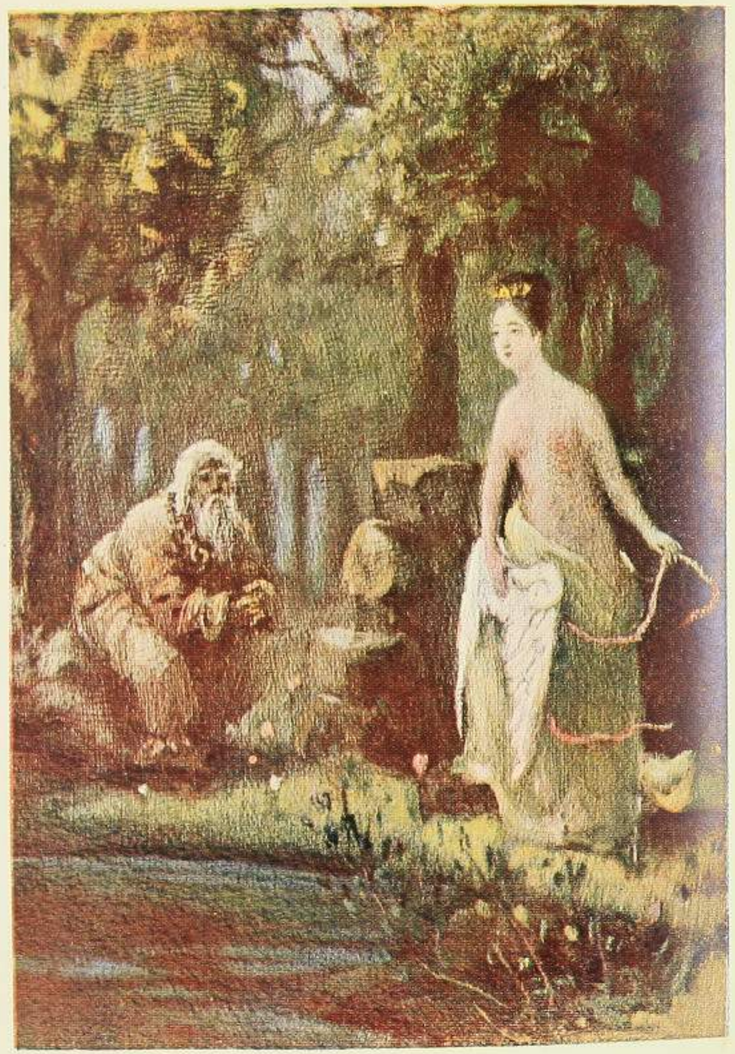
任を負せて降したる
みこと伊弉諾、伊弉冊は、
たゞよひ浮ける大海に、
黒き陸土をさぐりえて、
構へおこし〻八尋殿、
こゝを組戸に臥しなれて、
産みし男の神、女の神の
その大兄は、長たかき
大事忍男、いもうとは、
やはら肌なる石巣姫、

つぎは、肉むら厚肥えて、
胸張だかの海の神、
つぎは、嘆息あららかに、
髪みだれたる志那都彦、
つぎは、木の神、山の神、
さては、緑の被衣きて、
花笑ふくむ萱野姫、
さてしも足らず伊弉冊は、
よろづの榮のもとゐなる
天の光を奪はんと、

おほ殿ごもるわが顏を、
思ひぬすみて產みし子ぞ、
あはれ迦具土、――僭越の
胸にやどりし父無し兒、
ほしいまゝなる母ゆゑに
咒はれぬべき生れ日や、
その日、生命は死を孕み、
その日、淸きは醜きを、
善きは惡きをはごくみて、
絕えず自らなやむべき、

ふところ枝を芽ぐましめ、
その日、母なる伊弉冊は、
子の迦具土の息の火に、
胎のやどりを燒き焦し、
(後世さはなる產ず女の
一座や、)またと孕み得で、
罪と滅びの屯なる
黃泉の眞洞におちいれば、
嘆きあまりし伊弉諾は、
『母の咒ひと、繼父の

怒りのむくい、斯れよ。』と
追へば、刀むかふ迦具土の
手楯もとめず拔擊に、
はたと肩より斬りすてゝ、
劍は鞘にその父は、
妻覓狂の脚はやく、
黃泉の眞洞のくらやみに。
子はまた仰にくつがへり、
なげきは遠くとこやみの
母の枕にどよむまで、



深手のいたみ訴へつゝ、
焔生血の血そばへに、
身をもがくよと見る程に、
斬りはなされし胸乳より、
骸はふたつに中裂けて、
左は飛びて野火となり、
萱野の姫にすがりより、
右は潜みて竈火となり、
石巣の姫にかしづきて、
わゝ常ひさに人の世の

まめやか者に呼ばるゝも、
咀はれの身はせめてもの
贖ひとこそ言ふべけれ。
黄泉に降りし男の神よ、
ひと度戀をこゝろみて、
また愛妻を得させよと、
透戸の闇のかいまみに、
蟲とろゝける伊弉冊の
寐様見すれば、尻ごみて、
ぬき脚しつゝ比良阪の

關に落ちゆく戀ざめに、
女神はたへず立ち上り、
醜女、雷よびつどへ、
速石の里に追ひしきて、
久志の濱べの天の橋、
攀づる踵を蹈むまでに、
橋のたもとに縋りしも、
あがなはれざる『罪科』の、
はたまことなき『執念』の
えは許されぬ腹だちに、

男柱あらく揺りどよめ、
天の橋立なか折りて、
再び黄泉に逃げいりぬ。
（橋のなかばは倒れ伏し、
さながら海の背乾鯨、
波間に肩をうかべては、
罪あらそひの基なる
そのかみの日を忍ばしめ、
なかばは高く折れ殘り、
朝日夕日に照りはえて、

空のひかりの色を添へ、
かたた欄干の横づらを、
遠山の端にゑがきては、
虹の花環に、高天の
榮と力をにほはしむ。）
されば、その後災禍を
末の子どもに絶たましと、
日も夜も守を戒めて、
黄泉の大戸を固むれど、
天の通ひ路なか絶えて、

訴へ願ひのすべなさに、
伊弉諾の裔人の子ら、
ながき嘆のなからめや、
やよ高座にさぶらへる
天馳使、なんぢらの
八人を撰りぬ、疾くおりて、
下なる樣を見てまゐれ、
み空に黄泉にふた親の
ひとりを殘す孤兒よ、
世にも幸無の宿世や。』と

玉のみ聲のたからかに、
殿に鳴りてどよもせば、
『畏まりぬ』と、高座の
み階の下にひれ伏せる
天馳づかひ、――八柱の
『信』よ、『希望』よ、『清淨』よ、
『智慧』よ、『操』よ、『忍辱』よ、
『正義』よ、『慈悲』よ、白がねの
羽衣ひろく張りあげて、
天の八十蔭まかりいで、

おほ空雲路高ゆきに、
列流しつゝ駈けくれば、
門こそ立てれ、金銅の
八十抱なる太柱、
根は渾沌の淵に入り、
楣がゝりは目ざとなる
鷲の遠目もさゝぬまで、
矛立たかく天に伸び
しろがね張の雨扉、
開け放ちたる左右には、

見よ『勇猛』と『精進』の
衞士らふたりの大兵が、
赤熊の冠、くろがねの
鎧すがたよ、譬ふれば、
西恒春の夏のくれ、
『あみす』族の裸子は、
椰子の木かげに腹這ひて、
筏こぎよる日黑みの
親の手練に見入るころ、
支那の海なる夕づく日、

爪ぐれなゐに雲染めて、
おほ空たかく射す影に、
麓は闇にたちながら、
峰は照みの紅頭嶼。
『見よ、天門の影おちて、
羽含み隠すくらやみに、
かすかに揺ぐ薄あかり、
かしこぞ、命伊弉諾の
裔の住ひ。』と矛とりて、
道語りするはなむけに、

天馳づかひつきつぎに、
門を脚早にかけいでて、
飄へるよと見るほどに、
やをら伸羽を沈めつゝ、
天路をすべる流星の
はるかに遠く、また遠く、
直走りゆくすがたかな。

二

下なる國の比治の山、

比治の山なる頂きに、
岩垣なして湛へたる
眞名井の水の清ければ、
ひと日は、雲の若をみな、
白裳なびけて舞ひ下り、
なよび姿をうつし見て、
笑顔まろらに山祇の
大殿さして往きすぎぬ。
ひと日は、風の童がた、
螺髪みだれて駈け上り、

咽のうるほひ飽き足りて、
また落葉樹の村立に、
勢あらく飛び去りぬ。
今日また山の頂きに
あま降り來し八柱の
神の使よ、旅やつれ、
垢膩をすゝぐと岩が根に、
白がね衣脱ぎすべし、
鹿の子の如く小躍りに、
眞名井の縁におりたてば、

水は身柄のおもぶせに、
踵のかげにかくれしが、
眞玉和手にむすばれて、
髪のかゝりば匂やかに、
肉むら白き撫肩や
まろき垂乳のふくらみに、
はらゝぎ轉ぶ玉みだれ、
水の面にこぼれては、
香ひ油ととろけつゝ、
水際の草にしぶきては、

星斑なるかゞやきや、
花こそ咲けと見る程に、
誰ぞ、いかなる戯れぞ、
木鼠鳥もかよひ來ぬ
山頂のこゝにして、
衣脱ぎすてし岩垣に、
爪立ながらうかゞふは、
さては人氣と、目ざとなる
眞名井の水の目くばせに、
さと面がはるをとめらは、

『ものこそ近に窺へ』と、
立つや頻吹もはらゝかに、
天つ羽衣ひきかつぎ、
さながら海の旅人が、
伊豆の沖なる朝凪に、
遠ながめする鳥柱、
中空たかう駈けのぼり、
勢ぞろひして數ふれば、
あやしや、群は七人の
『誰ぞ失ひし一人は』と、

たか胸騒ぎ押へつゝ、
目蔭をさして見かへれば、
あなや、乙姫『慈悲』ひとり、
羽袖もさゝず眞裸に、
眞名井の緣にゆきかへり、
また幾たびか額づくを、
岩垣ごしにうかゞひて、
したり顏なる翁さび、
なほ兎もすれば逃脚の、
『渠は誰が子ぞ、下の世に

いづれは憎きねぢけ人、
見よ、たばさむは乙姫の
羽衣ならぬ何ものぞ、
眞名井の水に浴ぶるまに、
盗みけらしや、疾くゆきて
徙座へこそ。』と天をとめ、
譬へば、春はきさらぎの
津輕の海の望潮や、
渦潮たかく鳴るころに、
外が濱べをかへる雁、

伸羽つらねて引鳥の
頭あがりに細りつゝ、
渡島の空へわたる如、
上り羽うちて高ゆくや、
眞名井に殘る乙姫の
遠目にしろき羽ごろも、
雲がくれつゝ、光りつゝ、
さては消えぬと見入る頃、
あな、天門のかなたには、
今かへり來し七柱、

衞士ら二人が驚きの
眼つぶらに見はるまで、
打あらゝげし羽叩きも、
旗なびけたる天軍の
門迎へする勝どきに、
張臂脆くくづをれて、
み階のもとに倒れ伏し、
涙がちなる村聲に、
事の仔細をきこゆれば、
天の御蔭の太柱、

こだまに高くどよみつゝ、
御帳のうちに聲ありて、
『雲路はるかに往きかひし
天馳づかひ七人に、
たぐひ稀なるほまれあれ。
あゝ天の橋絶えてより、
自ら世をば營みし
伊弉諾の裔、――人の子ら、
神に屬する德性の
いづれを久に缺ぎしやと、

心構へのこゝろみに、
和奈佐翁よ、乙姫の
『慈悲』の羽袖を抽けりとは、
いじくも物を撰びたれ、
かくてそのかみ伊弉冊が、
子の迦具土の息の火に、
焦しはてたる永遠の
女性は遂に招かれて、
（さても譽れの四人や）、
また人の世にかへり來ぬ。

その乙姫の胸乳より
日も夜も絶えず滴らむ、
慈悲よ、泉に湛へては、
汀をあらひ野をひたし、
木の根草葉のうるほひに、
小川となりて流れゆき、
空の廣みに浮びては、
風の仲羽にまたがりて、
山には青き靡葉を、
少女の如く笑はしめ、

海には白き浪の穂を、
犢の如く躍らしめ、
人の心にかくれては、
見、聞、知るべき現象の
よろづに吾を、さてはまた
よろづを吾に往きかへり、
黄泉にくだり、天に攀ぢ、
父と母とを呼びさまし、
かの『過去』と『未來』の
假さだめなる名を絶えて、

大なる『現在』の新代に、
甦へりたる民として、
榮と力に足ひたる
歡喜の日に濡れしめよ。
そのむくいには、『永遠の
女性』をひとり汝が名にて、
黄泉の軍をしたがへて、
天なる宮の煌星の
うてなに歸る『人の子の
勝』ぞ、其名に許すべき。

あはれ天人、人の世の
根ざしは斯て据えられぬ、
また新なるたくらみに、
まめ心ある汝らの
才と力を籍らんまで、
往けよ、守りの務めに。』と
令旨ほがらにありければ、
『あはれ畏き御言葉や、
君は千代ませ、千代ませ。』と
推しつどひたる天軍の

諸聲たかく張りあげて、
勝鬨呼ばふどよもしに、
空は高脛よろめきて、
折れ殘りたる橋立の
柱がくれに取りすがり、
身ぶるひしつゝ蹙れば、
見よ、下の世のかなたには、
和奈佐翁の痩法師、
膽つぶれたる驚きに、
天つ羽衣とりおとし、

眞名井のふちに身を伏して、
上目に姫をぬすみつゝ、
忍びにひゝと泣き入りぬ。

（三十六年十一月）

おもひで

春の夜はしづかに更けぬ、
はゆま路の並木のけぶり、

箱馬車は轍をどりて、
宮津より由良へ急ぎぬ。

朧夜の窓のあかりに、
京むすめ、難波商人、
朽尼や、切戸まうでや、
人の世の旅の道づれ。

物がたり吹呿まじりに、
眠り目のとろむとすれば、

誰が子にか、後のかたに
をりからの追分ぶしや。

清らなる聲ひとしきり、
谿あひのさゝら水なみ、
咽び音に響きわたれば、
乘合はなみだこぼれぬ。

月落ちて闇の夜ぶかに、
箱馬車は由良へとゞきぬ。

客人は車をおりて、
西東みちに別れぬ。

その後やいく春經けむ、
おほ方は夢にうつゝに、
忍びてはえこそ忘れね、
由良の夜の追わけ上手。

その子今何處にあらむ、
思ひ出の清きかたみや、

人々のこゝろに生きて。
とことはに姿ぞわかき。
（三十六年二月）

おもかげ

花薔薇咲くなるかげに、
蜘蛛の子の日向ぼこりや、
花びらのこぼるゝ日なか、
はかなさの夢こそさむれ。

現し世のをはりのゆふべ、
死の黒羽こそろとおちよ、
おもかげの夢さながらに、
むねの君あまつみ國へ。

なゝろの鏡

夕ぐれの小霧のまぎれ、
やま鳥はけはひ靜かに、

野がへりの翼おろしぬ、
やまの井の井手の禿木。

水の面のますみの色に、
やま鳥のをろの鏡や、
くづをれの少女が胸に、
そのかみの夢のたゞよひ

眞廣げの退羽たゆげに、
やま鳥は森にかくれぬ。

夢ざめしうつゝの心地、
山の井のふかき吐息や。

夜の幕ゆらゝに落つる
夕闇の醸みのふかみに、
山の井は斧の柄のくつ
束の間を初めて知んぬ。

（三十六年十二月）

戀ごゝろ

草にならばや、
葵のくさに、
卯月なかばの酉の日や、
加茂の御生の片かづら、
君の御髪にかざされて、
一日を榮に枯れたさに、
草にならばや、
あふひの草に。

花にならばや、
菫の花に、
垣ね芝生のあさじめり、
息ざし深き濃むらさき、
きみがあゆみの蹠に、
やをら踏まれて死にたさに、
花にならばや、
すみれの花に。

鳥にならばや、
鷦鷯の鳥に、
山頰白鳴かぬ日も、
枯野の木原くゞりきて、
園生の芭のかたかげに、
君の御聲を聞きたさに、
鳥にならばや、
さゝぎの鳥に。

水にならばや、

岩井の水に、
夏かげ深く湧きあふれ、
一日日盛りうるほひに、
やはら手圓う掬ばれて、
君のみ口に觸れたさに、
水にならばや、
岩井の水に。

貝にならばや、
子安の貝に、

鵜の羽葺屋の通ひ路に、
龍の宮女にはぐれ來て、
濡身を君のまし手に、
御肌の幸を守りたさに、
貝にならばや、
子安の貝に。

蟲にならばや、
寵馬の蟲に、
あり明月夜さし洩るゝ、

さむき厨のいそしみや、
君がなよびの朝すがた、
慰めぐさに鳴きたさに、
蟲にならばや、
いとゞの蟲に。

玉にならばや、
眞珠の玉に、
煌の身きみが紅さしの
指にかゞやく許されか、

さては遠海のみなぞこに、
吾世沈みて朽ちたさに、
玉にならばや、
眞珠の玉に。

たのむ願ひは、
後世の誓ひ、
わが身七度うまれえて、
七度わが世撰らるとも、
えやは變らめ、戀ごゝろ、

君に捧げてありたさに、
たのむ願ひは、
後世のちかひ。

後の逢瀬は、

さもあらばあれ、
相見がたかる現し世に、
男をみなの人となり、
かたみに深く慕ひよる、
今のえにしを思ひては、

後の逢瀬は、
さもあらばあれ。

戀のわな

あけぼの破るゝ光にながれ、
然りやな、
君にまとひて、
面照はなにほてるまで、
さりやな、

戀のたはむれ、
さりやな。

日なか小百合の蕚にかくれ、
さりやな、
君に折られて、
息のかをりに咽ぶまで、
さりやな、
さても口づけ、
さりやな。

夜ぶか夜殿の夢路にひそみ、
　さりやな、
　をぐな姿や、
君と花野のめぐりあひ、
　さりやな、
　胸もゆらゝに、
　さりやな。
はては黄泉門の眞闇にしのび、

　さりやな、
　君を待ちえて、
諸手やはらにかき擁き、
　さりやな、
　ながき眠に、
　さりやな。

貧しき浦里にして

霜月ずゑのさびしさ、

日も夕ばえぬ浦まや、
かなた洲崎のはづれに、
夕づゝ低うかゝりぬ。

苫屋がへりの蜑が子、
ほくそ笑する今宵か、
葦原がくれそよろと、
いさり小舟の滑りや。

巽風のさやぎ、和らに

河原よもぎに掠れて、
渚づたひに消ぬれば、
闇こそ落つれ、ゆらゝに。

かゝる夕、僧尼らは、
沈默ふかげの雲居に、
きくや、足の音、天つ女の
そゞろ歩き、ゆるらかに。

かゝる夕、盲人らは、

微笑み泣くや、忍びに、
心の闇の八衢、——
慈悲の御影見るにこそ。

思へ、浦まのゆふぐれ、
刺網干さん玄ばしも、
おほみ力にほひては、
和魂かくぞ醉ひぬる。

わが世の寶憂身の

心よわきへりくだり、
今宵はわきて操に、
その御力のまにまに。

（三十五年十一月）

白膠木もみぢ

神無月のつごもり、
時雨もよひの午すぎ、
乾跡も見えぬ山路に、

白膠木紅葉のこぼれや。
昨日はこずゑ、今日は根、
ゆくへも知らぬ弱げさ、
寂しみふかき身ゆゑに、
大御ぢからのまにまに、
はらゝぎ行くや乾反葉。

もぐらもち

新嘗まつりほどちかき

霜ふり月の朝まだき、
乾反葉しらむ離根に、
骸こそ見つれ、鼹鼠。

もとより闇の私生兒の、
窖に隱れてあるべきを、
新墾小路うがちきて、
見しは光か、やがて死か。

今はの一目、くらやみの

八百日を夢になぞへしや、
さても瞬き、――大慈悲の
龕の御かげを見隠しに。

げにや死こそは波羅蜜の
岸の夜あけの初びかり、
ひかりなればぞ闇住の
身にしも望み、――はた恐れ。

（三十六年十一月）

霜月の一日

洛東若王子路のそぞろあるきに

一

神樂岡のかなたに、
十夜法會もをはりて、
日射よ、日ましに薄れゆけば、
鼠は路をとざして、
眞闇の窖にやすらひ、
燕はいく群伸羽なめて、

高原つゞき南へ、
夏かげたづねて海をこえぬ。

二

野もせの小草しをれて、
都ほとりの白河女、
花箕のさびれを見るにつけて、
み冬の女神白姫、
わが世ひとりのすがれに、
御門の柱にすゝり泣くや、

高萱そよとかすれて、
時雨ぞしのびに注ぎかゝる。

三

なぐれの雨の片寄、
野路まだらの濕りに、
おち葉は乾反の歪み伸して、
濡身伏葉のみだれや、
風は素脚の寒らに、
投荷よ、はらゝに吹き殘して、

蹶ざはり荒くも、
から山木立に急ぎ去りぬ。

四

裝ひ衣すべして、
野山素裸のさびしみ、——
うらびれ心地に眺むるにも、
睦魂ふかく忍びて、
おほ御力の息ざし、
不壞なる釀しに醉ひの今ぞ、——

わが世譬へば落葉の
それさへ可惜身(弱げながら)。

五

時雨は暫しとだえぬ、——
鈍色あさき雲間に、
ゆふ日のあからみ匂ひほのに、
かなた貴船のあたりや、
虹の環花にうかびて、
かざすと見るまに嚥て消ぬる、

さても刹那のひらめき、——
見るだに涙のせきもあへね。

（三十六年十一月）

霜月の一夕

洛東岡崎神社の前にたゝずみて

一

日枝山、照のあかりは、
み空の青にかへりぬ。

山なみむらさき鈍み仄に、
灰がへるやの今はを、
あな『夕暮』のたゆげさ、
しろがね被衣の狭霧ひきて、
立てるや、木原下道、
うなだれ勝なる身様はなに。

二

黄泉の眞洞の空鳴、
鐘ものうげの動みに、

『ゆふべ』は白みの額をあげて、
心ゆるびのくづをれ、
弱肩そゞろたゆらに、
息ざし深げのたゝずまひや、
その羽含みの釀しに、
目路みな沈默の蕩けごゝち。

三

小風よ、羽向こそろと、
草葉がくれのさやぎに、

木原の乾反葉みだれ脚に、
ほのぐれ路をかなたへ、
さながら蠱の手練に、
魑魅よ、はらゝに逃ぐる如く、
そゝ走りゆく身輕の、
人醉はしめなるすゞろ種や。

四

かなた水沼の汀に、
青鷺ひとりおりゐて、

漁るとしもなき翁さびに、
物思はしの目ざし、
ま菰水草すがれて、
水面のさびしみ色をふかみ、
夢見心地の見とれに、
さこそは歸さも忘れけらし。

五

今し天なる御力、
なべての胸に躍るや、

隱れの玉琴細緒ゆらに、
鳴るは秘密のさゝめき、
みぎはの眞菰、さびれの
一葉にこもれる聖ごゝろ、
そゝや的矢の逸りに、
身にしも泌み入るきほひ見ずや。

六

この夕暮のせつなさ、
なべての物に流るゝ

奇霊の力のおほいなるに、
さこその覺り、――心の
妙じきゆらぎ見るにしも、
内なる應ひを思ひえずば、
あゝ玉敷の世ながら、
惑ひや、いさゝか擁きつらめ。

（三十六年十一月）

花賣女

ひととせ小野の草苅に、
物憂がほなる白河女、
牧の小路の眞夏日ざかり、
木かげに遇ひぬ萱野姫。
やれ、やれ、やれな、
ゆくりな。

『そのかみ、鰐に剝れたる
高草の村の野兎の
素肌に被せし蒲の花鉾、

われにも給べ。』と白河女。

やれ、やれ、やれな、

ねがひや。

『兎は肌のさむけさに、

蒲の花鉾得は得たれ、

小百合、なでしこ花こそ殘れ、

汝が故はや。』と萱野姫。

やれ、やれ、やれな、

ゆゑよし。

『されば よ、髪の花かざし、

都おほぢに白鞍の

人もぞ見め。』と面照はなに、

口ごもる樣や、白河女。

やれ、やれ、やれな、

恥らひ。

をとめが戀の童氣に、

笑みひろごりし胸乳より、

花は八千種はらゝに落ちて、
野もせの亂れ、萱野姫。
やれ、やれ、やれな、
くれなゐ。

花草びびに撰りかざし、
あさなあさなの都入り、
また白鞍の君をこそ見ね、
なりはひ得つる白河女。
やれ、やれ、やれな、

花うり。

おもかげ

額じろの
さゝら愛男、
たゆげの少女さび、
白よそほひのくづをれや、
あゝしづか夜の
星の煌路のゆき摩りがひに、

なげく吐息よ、
落葉林の小霧のなびき、
さては茅原のした露。

わが胸の
君がおもかげ、
やはらの眞玉肌、
菫かざせるなよめきや、
あゝしのび寢の
胸のゆらぎの堪へせぬなやみ、

したふ心よ、
わが世あらたの生命のきほひ、
さては常世のやすらひ。

澤瀉の歌

こもり沼の水銹の面に、
澤瀉のひと花ぐきや、
夏の日の光にぬれて、
息ざしのけはひ深げに。

もゝとせの生命の釀し、
葉とひらき、花とくゆりて、
ひと夏のこゝろ驕りや、
こもり沼の上なだら水。

やはら風そよろの渡り、
葉はゆれぬ、花はこぼれぬ、
沼姫のほくそゑまひか、
さゝら波輪形の皺み。

今しこそ、胸のとろ火の
もゝ絡み靜かに解けめ。
使ひ女の老女しろ鷺、
眠り目の夢見すがたや。

ありや、かの歸依の和魂、
あくがれの心のふかみ、
かゝる日のふと現はれて、
束のまを、——また身隱るゝ。

ことうた

一、待ごころ

こよひ花野の夕づくよ、
君待ちくらす心地して、
月映あかり面はゆき
すゞろ心の胸のときめき。

三歳は過ぎぬ、また更に
誰が子か待ため、當時の
夢ほのかなる甦り、――
はな殼すみれ香に匂ふ世や。

二、海女

君は都のさかしら女、
磯まの小屋のおとづれに、
蜑が言葉のつたなきを、
いかなればとや問ひ給ふ。

身は海松刈る潜き女の、
浪路のそこに沈み入り、
眞珠、珊瑚の玉しける
龍の宮居に目馴れば、

海の秘密を洩すやと、
おほ海神のうたがひに、
をんなの才を奪はれて、
さは愚かしくなりはてぬ。

三、紅梅

雪消の岡のせゝらぎや、
流れ流れてゆくすゑは、
蓴菜つのぐむ大澤へ。

思ひ亂るゝ人の子は、
紫野ゆき、萠野ゆき、
紅梅咲ける君が戸へ。

暮秋野徑の石に凭れて

一

かゝる夕や、野伏は
遠里小野のゆきくれ、
夕映ほのに紅める
豐旗雲を見るにも、
すゞろ遙けき里居の
族が笑やおもひて、

旅路の憂も知るらめ。
それには似ねど吾世の
もの疑ひのわびしさ、
心なぐさの術もと、
ねよるや、あはれ野の石、
しろきは神の額か、
入日にぬれて映げに。

二

千歳を八十の年月、

靜かに、ゆるに、圓らに、
石よ、汝のぬる間を、
人の子ひとり覺めて、
法よ、道よ、何くれの
臺まうけの營み、
休ひもなき姿や。
ひと日天なる高聲、
時こそ來れ、さめよと、
雲路とゞろのどよみに、
夜ながの夢はやぶれて、

みじろきそむる曙、
見るや、いかに、人の子の
小さ臺の片かげ、
くづれの石を枕に、
襤褸素脚の寢ざまを。

三

形に花のきよらさ、
魂にともしのあかるみ、
さてしも人は產れて、

許されの世をたどるに、
路さまたげの何はあれ、
内なる弱み、――まどひの
さかしらがりを見るにこそ、
すぐよか心、――さしもの
きほひも萎れはてぬれ。

四

人さかしらの濫らに、
胸乳の冷をぬくむと、

盗まざりしや、御座の
天つ火盤の火しづく。
雫とみに咀はれて、
損ひものとなれりや、
吾世のほこり、智慧の火、
燃りよ、いよよ明らに、
火かげよ、いよよ陰りぬ。
齋き、何日かは、天なる
もとの姿にかへさめ。

五

間近き麓木原の
乾反葉がくれこそろと、
春つげ鳥のあさりや、
さながら今は里居の
埴生が小屋の乙嫁、
なりはひにこそ疲るれ、
やがて白梅咲きくゆる
きさらぎ半ば、涅槃會の
晝あたゝかき門にして、

ほがら鳴する日あるを、
われらいつかは内なる
靈妙の釀にぬくもり、
なべての物に流るゝ
大み光も掬みえて、
いのちの火をや照さめ。

六

かなた椀樹のした路、
甕をいだきてかへる子、

をとめと吾をわかちて、
いかゞや石にかたらめ。
あはれ吾らのながらへ、——
ながらへのみぞ、弱げに、
はた眞裸に、常世の
さびしき海にぬよりて、
沈默ふかげのたゝずみ、——
わが世磯回の蘆の葉、
むかしも今もいのちの
破れやすきを知るのみ。

七

さは弱げさの身ゆゑに、
おほみ力にかへりて、
ふところ深の隱れに、
よみがへるべき人の世、
その新身をおもひて、
躍るや、胸の利ごゝろ。
石よ、みづから忘れて、
なが大母にゆだぬる

歸依ぞ、――わが世の導き、
智慧の火盤の忌火や。

八

あゝ蘆鴨の水がくれ、
また浮くごとき心の
常めづらなるきほひや、
いつかは荒の人の世、
汝が名に、玉のうてなの
高らかに、はたつらゝに、

天そゝり立つ日あらめ。

九

かなた、やはらの雲衣
つま紅のかくれに、
日ぞ沈み入る靜けさ、
石よ、天なる御燈、
夕づつ白き燃りの
とのゐ姿やまもりて、
夢見ごゝちの聞ほれ、

わが世の富を知るべく、
貸さじや、汝が背、暫しを。

（三十四年十一月）

神無月の一夜

一

夢こそざむれ、――魑魅の
忍びあるきのさやぎや、
秋雨そよろとしぐれかゝる

眞夜なか時のさびしさ。
おほみ光の見とれに、
酔ひては和魂おもてぶせに、
われかの心地、かくれの
物蔭ほしげの童女さびや。

二

深山つぐみの古巣に、
孵りもあへぬ鰕の
いのちの閉しに思ひうみて、

あくがれ心夜な夜な、
涙もろにも祈れど、
み靈のひかりは絶えて見じを、
こよひはいかに照しの
煌なるすがたぞ、(小さながら)。

三

あゝ大慈悲のみ靈に、
さゝぐる歸依の忌火や、
さびしき燃りにこゝろ醉の

わが身、——火採の童部、
おほみ撰にかなひて、
常世に生くやの今の若え、——
夢とは、——かゝる明らの
心のあかしをいかに見まし。

四

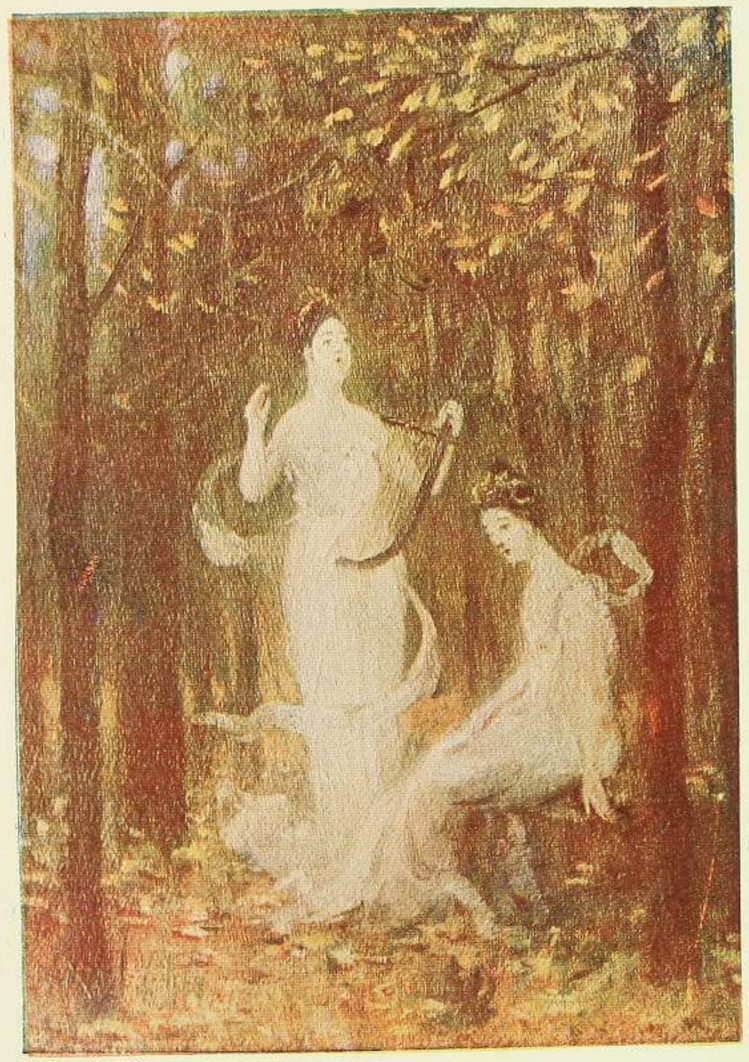
さりとも今宵おぼろの、
またの夜さやに見えずば、
寧ろや、眞夜なか、背黑五位の

やはら四毛にまたぎて、
罔象も眠る水沼の
蘆原がくれに伸羽うちて、
天なる宮の御階や、
攀ぢてもふたゝび世にはあらじ。

（三十六年十月）

神無月の一日

——木の間のまぼろし——



やはら四季にさたまりて
間象も繁る水沼の
遠原がくれに御羽うちて
天なる宮の御殿や
拳ぎてもとたゝび世にはゆらと

（三十六年十月）

神無月の一日

——木の間のさほろし——

一

日は神無月つごもり、
風氣もさゝぬ陰野に、
若木の村だち、櫟ばやし、
散葉の亂れ、さながら
醜女が蠱のてだれに、
いもうと、木の花咲くや姫の
若子の御靈はらゝに、
黄泉路の大戸に落つる如や。

二

渡りの鳥のひとむれ、
伸羽なめて末廣に、
峰越のかなたへ落の今を、
葉もりの光、陰路の
星まだらなるあかりや、
ほのかに狭霧の白み射して、
ものゝ香深きくゆりに、
醉こそいざなへ、——心ゆるび。

三

あなや上枝の絡みに、
風かの渡り、しのびに
おこるは、かすけき女樂の
心あがりの物の音。
乾反葉さやぐ木の間に、
使ひ姫七たり、すがた花に、
白よそほひのなまめき、
浮ぶや、たゆげの霧のまぎれ。

四

小春の日和ゆるかに、
天なる宮のきざはし、
降り居の今かも、あまつをとめ、
秋野の女神染煙、
わが世の末のさびれに、
なぐさみ物なるすゞろ種か、
否や、側見のひとりが、
掛想の人めく髪のかゝり。

五

向きこそ直れ、——緑の
小百合葉胸にまとひて、
よわ肩圓らのなよびすがた、
そよ忘れずのそのかみ、
別れし人のくづをれ、——
彈く手も柔なる眞玉箜篌の
しろがね音色、そよろと
さながら天路の夢のゆらぎ。

六

若音のひゞきたゆらに、
搖ぶるや、木々の垂り枝、
『かつては花野のすゝろゆきに、
わが世の宵の月白、
榮えよと笑みし吾が兄子、
いまはた木原のめぐりあひに、
もの嘆かしき身樣の、
した燃ふかげの心ばへや。』

七

篌篌の音、今かたゆげに、
水波ゆらのわなゝき、
『み靈のくゆりよ、大み慈悲の
あまつ光の滴り、
いづれは片身、――睦魂、
二の世のあけぼの、聖き宮の
無憂樹がくれの常世に、
ひとつに歸らむ日こそたのめ。

八

その許されの後遂、
聖の世をばたのみに、
路さまたげをや超えぬべき。』と、
あなや高音の中絶に、
しろがね衣飜して、
花笑あえかに寄ると見れば、
夢かの心地さながら
木の間にきえゆく霧のまよひ。

九

あゝ北海の浪路に、
おほ海神の手ずさみ、
潮氣にたゞよふ蜃氣樓の
すゞろ種なるならひや、
あくがれ心しのびに、
まぼろし描きし思ひあがり、
やがて吾世の轅を、
星への緣か、——おほみ諭し。

十

聖言葉や、聞くだに、
和魂ゆらぐよろこび。
相見よ、別れよ、故こそあれ、
わが世の途の事榮、
また躓きのいづれか、
おほ慈悲――影身の心ならぬ、
み惠みそれを思ひて、
微笑み泣くかな、涙もろに。

（三十七年十月）

虹の歌

一、旅人

木かげをいでよ、
雨はれて、
雲洩るひかり、
はなやぎぬ。

肩の荷ぬれて、
おもくとも、
宿とる程の
ひまとのみ。

旅ゆくひとよ、
口ずさみ、
小唄となふる
ならはしや。

そよ折からの
ものと見よ、
ゆくて國原、
虹かゝる。

京への道に、
山あらば、
虹見て攀ぢよ、
つゞらをり。

谿の棧路の
けはしくも、
脚のつかれは、
忘られむ。

京への路に、
水あらば、
虹見て乗れよ、
舟わたり。

瀬々のすべりに、
うつむかば、
舟酔ごゝち、
なやむらめ。

里のわかもの、
名は知らず、
虹の橋づめ、
見てなしと、

ながら堤を、
走るまに、
影うしなひし
ものがたり。

今し歌占、
をはらぬに、
虹は早くも、
くづほれむ。

あゝ世に、なにか
もろからぬ、
美しのものの
あるべしや。

されば旅寢の
ゆめまくら、
涙がちなる
夜頃かな。

一夜は米の
くろくとも、
をとめが胸の
白からば、

さぞな夜ながの
旅ごゝち、
都ごゝろに、
なぐさまむ。

祥こそよけれ、
煌の環の
虹をいさみに、
かなたへと。

二、獵人

くぬぎ木原に、鹿の子の
逃のすがたを失ひて、
峰越の路にわけくれば、

あな遠山の山の端に、
虹こそかゝれ、花やかに。

南の邦の繁山の
葉もりの影に片ぬれて、
小笹のそゝけ胸わけに、
陰路をわたる獅子の背の
たてがみ色も見おとらめ。
この日天路の南より、
北なるはてへ懸けわたす、

黄金反橋、虹の輪の
かゝるにほひに比べては。

神坐すところ、高御座、
天つ童部、――添ひ星の
忌火夜な夜な燃るかた、
日は顔ばせのかゞやきに、
月は胸乳のふくらみに、
星は瞳子のきらめきに、
雲は御髪のなびきにと、

おほせられたる象りの、
物こそあれや、虹の橋、
天の榮えと營みの
ときはの花ににほへよと、
大み額にかざします
黄金の冠、まびさしの
光によそふ玉の映え。

あゝ眞鳥の羽身にそへて、
雲路はるかに往くべくば、

天の反橋、はなやぎの
かなたの邦にまゐのぼり、
檀弓、眞鹿兒矢たばさみて、
おほ宮どころ、ひひ鳴の
天つ狐を追ひすがり、
すぐよか者の稱へ名に、
とのゐ姿やゆるされて、
玉の御階につかまつり、
御饗さがりの大御甕に、
甘らの酒も掬むらむを。

さもあらばあれ、雲居路に、
黄金のかむり、虹の環を、
高草の村の野うさぎに、
蒲の穂絮のよそほひを、
法吉の里のうぐひすに、
心やりなるさへづりを、
わかちし神のみめぐみは、
また里ずみの獵人に、
妻をこそ賜へ、うら若き

わが世の誇り、これぞこの
天つ座へのあくがれを、
やがて眞白のやは肌に、
酔ひ足すべき使ひ姫。
今日もぞ、身樣なよびかに、
萱屋の門の心まち、
み山がへりの人もやと、
峰越の路に見惱ひて、
さぞな花なるまなじりの
うるみ勝にや居凭るらめ。

あな谿岨の木がくれに、
尾長山鳥音こそすれ、
わか髪あをき山祇の
神もまもれな、窺覘ひ、
これよ、待れの今日の日の
唯の幸ぞとたはむれて、
涙もろなる乙嫁の
笑顔まろにや解くべき。

三、情人

男

花野繁路の
そゞろゆき、
うれしや、空に
虹かゝる。

身に初戀の
もゆればか、

胸こそをどれ、
今もはた。

女

若びとふたり、
草をふむ
野には、懸想の
ゆめ花に。
秋雨はるゝ、

染姫の
宮には、虹の
さかばえや。

男

君がむすべる
花の環は、
頸ひとへに、
足はじを、

おほみ手練や
天つ女は、
千尋にあまる
煌の輪を。

女

かゝる日、人は
たはむれじ、
反わたどのゝ
ゆきかひに、

あまつ八少女、
さゐさゐと、
玉衣ひきて、
舞ふらめを。

男

歸依の和魂、
人去れず、
沈默ふかげの

酔ごこち、
天つおほ路に、
玉沓の
足音を聞くも、
かゝる日か。

女

さもあらばあれ、
手ばさみの、

君が右手なる
玉やなに。
左は、『戀の
鶺鴒鳥、
然な。』と、吾手を
捲きながら。

男

こは、才たかき

うたびとの
戀ものがたり、
文の卷。

落葉ばやしの
木がくれに、
『鶴鶏』とともに、
讀みいらめ。

女

この日、野なかの
そゞろゆき、
もの深げなる
夕ながめ。

大みぢからの
花やぎに、
醉こそ足へ、
わが心。

男

傀儡まはしの
ひとさしに、
うき世の様も、
見るといへ。

涙もろなる
歌の卷、
これや、二人の
おもかげを。

女

いにしへ人の
卷にのみ、
男ひじりの
戀ぐさや。

垂乳まろなる
ふくらみに、
隠れの玉は、

見がくしに。

男

君は野なかの
さゝら水、
われを直路に、
みちびきぬ。
この日、花野の
そゞろゆき、

ふたゝび書の
名はいはじ。

女

いざ、君いそげ、
かなたなる
野なかの阜の
くぬぎ原。
虹の環かげに、

手をつれて、
鹿の子の如く、
舞はしめよ。

四、海人

嶋山かげのいさり舟、
幸こそ足へ、今はとて、
振さけあふぐ目移しに、
映ゆるや、天の棧づくり、

こがね色なる虹の橋。

波の穂しろくほのめきて、
引汐かへるかなたには、
龍の宮居のわだつみが、
長日のゆめ路いまさめて、
御門柱の居がくれに、
梁たかきおほぞらの
反わたどのを見やるにも、
さこそは天の大兄の

手だれや花に讃ふらめ、
遠つ海の音どよもしぬ。

この日、一葉の舟を浮け、
八潮路遠に漕ぎためて、
磯まにかへる海人の子の
たゆたの滑り、さながらに、
こがね煌の環、ゆるされの
玉の宮居にいたるやと、
海路の廣み、笑みがほに、

楫木にすがる浪もこそ、
眞白手あげて馴寄るかの
心あがりのまよはしや。

をさな遊びのそのかみに、
離れ小島の山めぐり、
姫百合折るとさす舟の、
磯まを遠く漕ぎいでて、
渦潮にまよひ入り、
今はと見えし危さに、

櫂取神を念じつゝ、
手溜りふとき櫂がらの
早緒も脆にちぎれよと、
櫂音たかくきしらせて、
潮瀬はるかに避けくれば、
折こそあれや、白虹の
天路にかゝる花やぎに、
童ごゝろよ、ほこりかに、
舟側とゞと踏みはりて、
勝閧たかく呼ひしが。——

今漕ぎなれて、さながらや、
身は海神の家の子に、
晝はひと葉の小舟、
潮の八百路にわけいでて、
漁歌のどよみたからかに、
曳網ながくたぐりつゝ、
夜は蘆原の櫂まくら、
浪のゆらぎを聞馴に、
龍の宮女にさむらひて、

鵜の羽葺屋の濱びとに、
宵の通ひをゆめみつゝ、
老いくちぬべき蜑が世に、
おほみ心や、日こそあれ、
ふたたび虹の花やぎに、
すぐよか心をどりては、
身は海神の孫ながら、
魂はみ空にあくがれて、
星の煌路の天の座に、
甦へるかの思はれや、——

神よこの日のおぼろげを、
やがてわが世の最果の
その日、朗らに見せたまへ。

あゝわだつみの夕ながめ、
たゆらに震ふ浪の穂に、
夕映あかりうすらぎて、
空には、かへる水鳥の
羽音のみこそ掠れゆけ。
いでや、かなたの浦めぐり、

入江の蘆に舟よせて、
夜をやすらなる夢にこそ。

五、農人

虹の環しろみに、
禍日さすと、
いにしへ人らの
心よわや。

今日しも野なかに、
小雨はれて、
うかぶや、玉橋、
天路花に。

里むら萱屋に、
人氣見えて、
粉磨ぐるなの
唄のわたり。

あるひは、培塿の
くづれ踏みて、
窖なる土龍の
路をたちぬ。

わが世のせつなさ、
いつはあらず、
日も夜も隙なき、
宿直ごこち。

樵夫は、圍爐裏に
脚をのべて、
雪の日まとひの
笑に醉ふを、

不如意や、われらは
しづれ小路、
麥ふむ兎を、
山に追ひぬ。

獵人は、山路の
瑞枝がくれ、
湧きちる岩井の
水に飽くを、

不如意や、われらは
眞夏日なか、
ぬるみの水田に、
莠ぬきぬ。

せめては、刈しほ
われは顏に、
はかなの思ひを、
よせぬべきや。

八束穗みだれて、
さやぐゆふべ、
秋の香くゆりて、
野こそかをれ。

風ゆき、蚊ばしら
浮ぶほとり、
童女は繪によき
樣に飛べり。

この時、さかえの
こがね鬘、
千尋の虹の輪、
あまつ宮に。

八十日夜、山田の
宿直やつれ、
さてこそ慰め、
笑顔花に。

小走り、木かげに
ひざまづきて、
忍びに祈るや、
心ゆるび。

夕雲かげ透き、
光させど、
稲葉のしめりは、
乾こそあへぬ。

小者よ、稲鎌
今日は磨がで、
濡身の犢に、
草をかへよ。

厨房の酒がめ、
口をきれば、
うまらや、酬に
泡も咲きぬ。

こよひは、與作を
まねききたり、
田の面の實りに、
掬みて醉はめ。

六、隱者

一

この日なべての和魂
さめよと、斯くや、虹の環、
南は八千尋、綿津海に、
北は八千尋、野ずゑに、
かくるは玉の反橋、
そぴらは遙かに雲に入りぬ。
あな屈りの世にしも、

自然ぞあまりに大いなりや。

二

眞闇の胞衣よ、やぶれて、
天地なれるそのかみ、
ひかりの若子は空にあれと、
虹もぞ天の常ばな、
隱れの宮にねむれど、
をりをり目ざめの時し來れば、
おほみ額をまとひて、

さかえと力の代こそ見されぬ。

三

あゝ常若の八をとめ、
忌火さゝぐるかなたの
不壞なる營み、――大みぢから、
天つ心のひらめき、――
われら日陰のなよ草、
わなりにか弱き身にしあれど、
この夕映の氣壓れ、

奇しくもせつなの氣こそ見えね。

四

そよ、心憂のなよひや、
わが存への最果、
その日の疑ひ胸に入りて、
身は物怖の心地に、
わなゝきやなぬ日頃を、
今日しも天路の七つ色に、
見ればか、あはれ人の世

さこその現れ、すがた花に。

五

われら常久の瞬き、
やがては消ゆる身ながら、
あくがれ絶えせぬこゝろ魂の
常新なるともりや、
この世さてこそ虹の環、
かなたに炎の宮居ありて、
その羽含みの深にや、

釀し、生命の火にはあらぬ。

六

あゝ現し身のをはりに、
わが世寂しき回顧、
時刼の暗谷、――天の常陰、
すぐよか心さながら
虹なる煌を見るにも、
微笑みかへらめ、(これや嘸な、
歸るさならめ、)隱れの

おほ宮常世べ慈悲の御園。

（三十二年十一月）

二十五絃 畢

正誤表

誤	正
三三頁九行——葉分……は	葉分……は
三四頁二行——夏の眞晝……は	眞夏日なか
六二頁六行——片かけば……は	片かげに
九五頁八行——法起菩薩……は	法起菩薩
九七頁八行——玉の顏……は	玉の顏
一一一頁三行——黑實……は	黑實
二〇四頁八行——空……は	空
二〇八頁三行——水草……は	水草
二四〇頁六行——十六年……は	三十六年
二四二頁九行——醉……は	醉
二五九頁八行——路に……は	路に
二九六頁四行——あへぬ……は	あへれ

明治三十八年五月十日印刷
同　年五月十三日發行

二十五絃
實價金壹圓

著者　東京市日本橋區通四丁目五番地　薄田淳介

發行者　東京市京橋區南小田原町二丁目九番地　和田めも

印刷者　東京市日本橋區通四丁目角　中野鎌太郎

發行所　東京市京橋區築地三丁目十五番地　春陽堂

印刷所　帝國印刷株式會社

●內に發行者●
●の印章無き品は偽●
無斷轉載を禁ず

再版

幸田露伴著　久保田米齋畫

心のあと

是れ一編の長詩なり

洋装四六判
紙質精良
印刷鮮明

實價八拾錢
郵税拾錢

五版

藤村詩集

島崎藤村著　和田英作新意匠
石版彩色畫挿入

洋装四六版頗美本　實價八拾錢　郵税拾錢

是、新體詩集なり。是、若菜集と夏草と一葉舟と落梅集とに散在せる一切の詩歌を蒐集せしものなり。是、著者が開拓せし詩想の道路なり。是、新しき藝術に入るの門なり。